

「国語通信」を活用した俳句の指導

―俳句を子どもたちと楽しむ実践紹介―

寄稿

元^{もと}常葉^{とこは}学園^{がくえん}大学教授

小林^{こばやし} 國雄^{くにお}

小学校における文学的文章指導の実践発表というところ、物語文の指導が圧倒的に多く、俳句や短歌指導の実践発表は極めて少ないというのが、一般的な傾向であろう。

しかし、ここに俳句や短歌の鑑賞指導や創作指導に情熱を傾けた実践記録がある。指導者は静岡県賀茂郡東伊豆町立熱川小学校教諭の黒田英津子^{えんつこ}さんである。黒田さんは経験年数二十年に近い中堅であり、明るく元気で意欲的な実践家である。

黒田さんの国語にかける情熱は大変なものである。それは、平成十四年度の場合、四月十五日に第一号を出した『国語ではつけよい』という、六年松組用の『国語通信』をほとんど毎日のように発行し、子どもたちに配っていることから分かる。第一号から第三号までは「命とふれあう」という題で「写真をみて想像したことを俳句や

詩、あるいは物語をつくってみました。」とある中の俳句を少し抜き出してみよう。(各句には作者自身の解説が付いているが省略した。また／印ごとに作者は異なる。)

山の中 花と花とがくれんぼ／富士山は 雲より
高いお山です／夕焼けと おそつてきそうな雲の波

「思ったことや感じたことを何でもいいから俳句にしないさい。」などという指導ではなく、黒田さんのように写真をもとにして創作させるのは、一つの手堅い指導法である。また、子どもたちの作品に対する黒田さんの眼は温かく、「子どもたちの想像力には、感心させられます。」という評語となって表れている。

『国語ではつけよい』は第十三号になると「私のお気に入りの俳句や短歌」となる。ここでは教科書教材(六年上32～33ページ)を踏まえた指導が展開されている。即ち、図書室にある児童向けの図書をも活用し、「お気に入り」の俳句を子どもたちに探させる。そして、「何度も声に出して覚えましょう。」と指導する。

子どもたちは、古典としては芭蕉・蕪村の句を、近現代としては山口誓子・黒田杏子・水原秋桜子・高浜虚子・日野草城・荻原井泉水・渡辺白泉・黛まどか・中村草田男などの句を「○○選」として選んでいる。

次いで黒田さんは「みなさんには、小林一茶の句をわ

たしますので、自分のお気に入り、小林一茶の句を毎日声に出して、読むようにしましょう。」として、一茶の句を三十数句示した。黒田さんがあえて一茶の句を子どもたちに提示したことに注目したい。一茶の句はいわゆる生活句で子どもたちに親しみやすく、リズムがあるので音読や暗唱に適している。それに加え、平成時代に入ってから現行版までの小学校の国語教科書(六社)に採録されているすべての古典俳句を調べると、芭蕉の八句、蕪村の五句に対して、一茶は二句(旧課程本で四社、新課程本で三社が採録)で、しかも中学校や高等学校の教科書には一句も採録されていない。

『国語ではつけよい』の第十四・十五号は「修学旅行に行く前の気持ちを俳句にしよう。」という特集である。「行く前の気持ちを俳句に」させる実践は珍しい。子どもたちの作品を見ると、

たくさんの 期待がふくらむ旅行前／きんちょうで
地図がさかさま班行動／旅行前 父さんの顔が大仏に
など、おもしろい作品がずらりと並んでいる。これらの句を黒田さんは学校長・教頭その他の先生方を選んでもらい、「受賞作とその評を紹介」している。ちなみに〈校長先生賞〉は「見るコース 歩く前から足が棒」で、この句についての友達の「評」には『歩く前から足が棒』

つていうところがいいと思った。〉、〈教頭先生賞〉は「地図を持ち みんなで乗ろう旅マシ」で、友達の評には『旅マシ』というところがすくいい。わくわくしていて落ち着かない感じが伝わってくる。」とある。

『国語ではつけよい』の第十八・十九号は「修学旅行で感じたことや見つけたことを俳句にしよう。」である。〈校長先生賞〉の句は、「風涼し 昔のままの切り通し」、〈教頭先生賞〉の句は、「いなかもの 改札口でとおせんぼ」であり、〈みんなが選んだ人気の句〉は「フラッシュで 大仏の頭五月晴れ」である。これらの句にも前と同じように友達の「評」が付けられているとともに、黒田さんの評価も添えられている。

黒田さんの姿勢は一貫している。それは、子どもたちを俳句に親しませようとする熱意であり、工夫である。

終わりに、紙面の許す限り、指導上の留意点(私見)を述べよう。①子どもたちにとって俳句は初めての学習であるから、教材の選定は学習者の実態に即して慎重に行いたい。②季節感を大切にしたい。③一語の持つイメージを大切にさせ、語句の重みに気づかせたい。④自分の好きな句の情景を絵画化させるのも一案である。